

大宮登監修『理論と実践で自己決定力を伸ばす キャリアデザイン講座 第3版』

日経BP社（2021年）

筆者が担当した『労働調査』（2022年3月号）に続き、“キャリア教育”（“”は筆者、以下同様）関連の著書のご紹介となること、まずはご了承頂きたい。本書は、前回ご紹介した藤村博之編『考える力を高めるキャリアデザイン入門ーなぜ大学で学ぶのか』（有斐閣、2021年）と比べると、テキスト本的な色合いがより濃いものとなっている。というのも、各章の終わりには、読者自らが記入可能な“チェックシート”や“振り返りシート”が用意され、各章での学びや気づきを本書の中で整理、実践することができる仕様となっているからである。

本書は全15章から構成されているが、大きくは「現代社会とキャリアデザイン」（第1章）、「キャリアデザインと人生設計」（第2章～第4章）、「キャリアデザインのための自己理解」（第5章、第6章）、「キャリアデザインと仕事理解」（第7章、第8章）、「キャリアデザインと職場理解」（第9章～第11章）、「キャリアのケーススタディー」（第12章、第13章）、「キャリアデザインに向けて」（第14章、第15章）といった7つの領域にまとめられる。

「現代は、自分で生き方や働き方を考える、キャリアデザインの時代」であり、企業間競争の激化、就労意識や長期雇用慣行の変化などがその背景にあるという。著者は、「自分の価値観、強みと弱みをしっかりと把握して、これからの生き方や働き方を考え、より良い生活設計をすること」がキャリアデザインの基本であり、年齢や状況に応じて変化するキャリア形成の課題に対峙するには、自分に求められている期待、果たすべき役割を常に理解し、自覚していくことの必要性を指摘する（以上、第1章）。一人ひとりが自ら考えて答えを見出し行動する、自己判断力や自己決定力が今の時代には求められている、ということになるのか。

また、キャリアデザインの基本的な共通要素の1つが「人生全体の設計」と考えられることから、現代人のライフサイクルの平均像、女性の働き方の変化、モデル家族の生涯収支をはじめ、キャリア形成に影響を与える社会や就労環境の実態などについて、各種統計データを用いてわかりやすく説明されており、参考になる（第2章～第4章、第8章）。

キャリア教育の1つのツールである“インターンシップ”についても触れられている（第9章）。昨今では、インターンシップが企業にとって採用活動の一側面であり、採用選考時における評価材料を持てるようになること、参加者にとっては業界、職種等の理解、自分の適性の認知に役立つ他、入社後のギャップ（本書では「リアリティ・ショック」として第10章でも取り上げられている）軽減にもつながることが報告されている。それとともに、インターンシップ経験者と未経験者の定着率や企業・自己理解度の差についても、各種調査研究から明らかにされている（例えば、NACE『2019 Internship & Co-op Survey Report』、パーソル総合研究所「就職活動と入社後の実態に関する定量調査」など）。企業とは別に、労働組合（とりわけ単組レベル）にも独自にインターンシップを導入してみたらどうだろうか（様々な制約があると思われるが）。そうすれば労働組合の認知度や理解度、労働組合に対する見方やイメージも少なからず変わってくるに違いない。

若干話が逸れたが、もう1つ“キャリア・アンカー”という言葉に着目しておきたい。この言葉は、エドガー・H・シャインが「一人ひとりが自分に適したキャリアを追求していくための『原点』を持っていて、それに引き寄せられるような影響を受けながらキャリアを形成している」と提唱し、その“原点”を“キャリア・アンカー”（「自律・自律、自由追求型」、「調和的ライフスタイル追求型」など8つの領域に分類）と名付けたとされている（以上、第10章）。キャリア・アンカーに適した仕事や職業とは何か…自分が仕事に何を求め、仕事は自分に何を求めているのか…自分で考え、整理し、行動していくこと、それが自分のキャリアデザインの実現に求められているともいえるだろう。

あるアイドルグループの楽曲の一節にこんな歌詞がある。

「人生は紙飛行機 願い乗せて飛んで行くよ…その距離を競うより どう飛んだか どこを飛んだのか それが一番 大切なんだ…」。地道に一生懸命取り組む過程が結果、キャリアに結びつく。どのような職場や仕事であったとしても、その中でどのような意識を持って取り組むことができるか、いかに経験やスキルを蓄積することができるか、それがキャリアデザインには重要となる。

2023年が幕を開けたが、今月は成人の日、もう少しすれば学校関係では卒業式や入学式、会社関係では入社式や定期異動など、キャリアの転換期を迎える。コロナ禍で働き方も大きく変わってきたが、自身のそれまでの生活や仕事、様々な経験を振り返りつつ、将来に向けてどのようなキャリアを積んでいきたいのか、1年に1度でもゆっくり考えられるような“余裕”を持つことも求められる1つの素養ではないだろうか。（小倉 義和）